

行為 出来事 場所

脱構築における経験の準・超越論性について

三 松 幸 雄

本研究が自らに設定する課題は、脱構築と呼ばれる事象をその経験の超越論的な構制と構造に即して定式化することにある。脱構築という辞項は、デリダの論稿「グラマトロジーについて」の中で最初に書き記された際には、初期ハイデガーによる存在論の「解体 (Destruktion, Abbau)」という構想に積極的な転調を施した概念として導入されていたが^①、或る時期以降から、デリダが持続的に展開していくことになる思想とその事象を多元的に告示する観念へと徐々に変容していく。さらに、諸般の転義や曲用をも被りつつ、一種の思考様式や方法知を指示する概念として様々な学問分野へと移植されており、今日では辞項としてのかぎりにおいて普く知られるところとなっている。本研究が基本的に定位するのは、程度の差はあれ、哲学の体系性と歴史性への厳密な関与によってこの事象に特有の拘束性と自由が維持されている一群の資料体である。

脱構築という形象は、一方で、しばしば人間的な行為との関連において規定されてきた。それは、例えば諸々の資料体の読解や解釈であり、また倫理・政治的な状況への実践的な介入である、と。しかし同時に、他方で、脱構築はむしろ存在論の文法に適合する「主体の公理系^②」のもとでは規定しえない型の出来事であるとされ、現前

主義的な装置に対する異質性が一貫して強調されてきた。志向的地平に導かれる行為は自己の経験を安定的に予料しうるが、全体視野を欠いた局所に生起する出来事は記述不安定性を例外なく示す。存在論は経験の時間性の全域を順序構造のもとに同期させるが、出来事の経験とはそれ自身の反復の痕跡であり、そこでは時間性の脱自態が錯時的な転位によって不規則に発散していく。脱構築という主語域はこのように、原理において矛盾や二律背反の關係にある行為と出来事の審級双方を経験の述語場とすることにより、定式化や定義という操作が有意であるために不可欠な論理法則に違背する構制を取っているわけである。いわば〈行為「出来事」〉という形式を取るこの経験の分割可能性を、デリダは〈二重のX〉という関数によって記しづけていた（XⅡ〔使用域、公準、法、読解、解釈、書字、手、運動、聴取……〕）。これらの形象は、経験の記述や推論の過程で発生する矛盾を必ずしも所与の論理的な障碍と見なすことなく、むしろいくつかのアポリアを真理論の系に新たに組み込みつつ考察を展開するために案出された構築体である。さらに、このような経験の可能性の条件には、脱構築の作働がそこにおいてあるところの脱構築不可能な場所が見出される。

本稿の課題には、遂行的な二肢構造をなす経験と、それを現出させつつ自らを退引させる場所論的な媒体性とからなるこの脱構築の構制を、位相論的模型に即して解明するという作業が含まれている。このような研究は、脱構築をめぐる従来の研究とは方位を異にする一定の理論的な様式を取っている。けれども、脱構築それ自身がまさに出来事の経験から存在論的な公理系への回付を許容する構制を取っていることにより、理論化を指向する戦略もまた、逆方向への回付の余地が残されているかぎりにおいて、合理的に正当化されるはずである。

論述の見通しをつけるべく、始めに構制に関する一般的な定式を仮説的な定義と命題群によって与える。次いで、その構制を位相論的装置を用いて構築的に捉え直すとともに、構築された模型とその使用に関する方法論的な考察を行う。第三節以降は、脱構築とその条件に関するいくつかの遂行的な定義や記述の試みを参照軸としながら、関

連する種々の概念や問題群、仮説系などについて検討する。

一 構制に関する定義と命題

定義 脱構築とは超越論的な経験である。

備考 それは行為・出来事・場所という三つの審級からなる分割可能な経験として構制されており、行為・出来事という二重体が脱構築不可能な場所においてあることで作働の必然性を与えられるという場所論的な三項関係を形づくっている。

一・一 第一の審級は〈行為〉の領域である。

一・二 行為とは、然々の存在様相⁽³⁾を取るところの、存在論的に記述されうる実践である。例えば、実存する行為者は、未来が不定にとどまる局所の側から選択や決定をそのつど下さねばならない。そのような行為は現実的に実行され、その所産は事実として存在する。ところで、この同じ行為は、それ自身の諸可能性を目的性との相関において全域的に与える志向的な地平によって導かれており、合理的に統御されてもいる。

一・三 行為としての脱構築は、規範的な歴史性によって制約を受ける人間的な行為者を起点としており、目的、信念、願望といった動機群や、意図、理由の秩序、志向性、等々からなる「主体の公理系」と不可分である。

備考 脱構築は、行為の審級において、とりわけ読解と書^{エクリチュール}字、解釈や解読、論理的な分析や歴史的な系譜学、等々の形式を取る学的な作業として自らを現実化してきた。さらに、或る時期以降、それは死刑制度の廃止、白人性を軸にして階層化された合法的人種主義の廃絶、近代の主権性概念に制約された国際法理念の更新、地域主義的に連携する共同主権の強化、等々という法・政治的な諸目的に関与する実践的な研究としても展開されてきた⁽⁴⁾。

このように、脱構築の行為とは、日常の慣習的实践やその哲学的理解を指向するよりは、むしろシステム変革に動機づけられた介入的実践であり、そのような実践を準備するであろう批判的で解釈的な研究である。そうであれば、それは所与の合法性や正統性を問題化する権利を可能的・現実的に所有しており、またそれゆえに義務と責任を負うところの、解釈者や自然人、法人によって担われる主体的な営為なのである。

一・二 第二の審級は〈出来事〉の区域を形成している。

一・二一 出来事とは、権利上、絶対的に特異な局所生起である。

一・二二 出来事の純粹な経験は、目的性や規則性の秩序にとって外的な現象である。

一・二二二 ただし、出来事の位置は事前の無関係性から事後の関係性への離接——〈関係なき関係^⑤〉——という様式を取ることで時間的な論理的な構造の中に指定されうる。

一・二二二 このような現象は存在論的な文法に抵触する^⑥。存在論は全域的に同期した現時的な空間・時間性の内に現象を分節してしまうからである。

かくして、この現象に共通する集合は出来事論とでも言うべき特有の領域を形成する。それは、存在論ないし古典的形而上学には下屬しえないものと規定された、行為と蝕の関係をなす区域である。この区域における脱構築の推論が存在論的な装置を迂回する諸々の特有語法や形象のもとに展開される所以である。

一・二三 けれども、それらの迂回法的な形象は存在論をいわば斜行する技術であり、そのためにも存在論的な装置は内的に、しかも出来事論がその可能性の条件に位置するような仕方、維持されねばならない。

一・二四 出来事はこのように、形而上学的な秩序に対して、内的な関係と外的な非関係を同時に維持する、という脱自帰属の形式を取る^⑦。

一・二四一 存在論と出来事論の脱自帰属は、行為と出来事の審級の位相論的な交叉という形式によって定性的に無矛盾な知解可能性が与えられる⁽⁸⁾。

備考 脱構築の構制を記述する際に不可欠となるこの審級間の脱自的な関係は、いわば特異性の一般化という範例性の論理を展開可能にする出来事論の法則を、構制の水準に写像したものと解釈しうる。その法則とは、出来事としての脱構築の真理性を正当に記述するためには、同と他、内と外、此方と彼方、近さと遠さ、事前と事後、等々という範疇素の対立的な各項を概ね等しく取らねばならない、という回付構造の非数値的な算術規則である⁽⁹⁾。このとき、範疇素間の対立・矛盾は、現前的に同期する時間表象がそこから超越論的に発生してくるところの歴史的な動性（「差延」）を記入する装置として使用されている。これにより脱構築の経験は、対立する範疇素のあいだで機械的に振動し、かつその反覆の只中で自らを概帰的に他化する、という空間・時間的に現前不可能な、いわば虚の實在性——〈錯時・空間化〉（anachronie-espacement）という歴史的過程の超-實在性⁽¹⁰⁾——を帯びることになる。「差延としての同者」、「同者としての全き他者⁽¹¹⁾」といったアポリア系の諸変奏は、このような法則ないし法のもとで正当に読解可能なものとなる。

換言すれば、出来事の比類なき唯一性は予測できない新奇性を歴史的に産出する同者の概帰的な運動によって構造化されているということである。特異性の概念によって再記入されるのは、同者におけるこの一種の超越論的な分割可能性である⁽¹²⁾。〈矛盾的一性⁽¹³⁾〉と形容することもできようこの経験の逆理は、差延や陥入、憑在論、告白、赦し、約束、等々という一連の形象へと無限に配分されていく。

一・二五 出来事の区域は、その構制上、行為の審級と、後に言及する場所の審級との交叉を介して、双方からの様相的な干渉を受けている。ここから、行為の存在様相と場所の〈不可能性〉のあいだで、可能、不可能という準様相性が、出来事としての脱構築に新たに指定される。

系 行為 出来事の二重襲をなす脱構築的な作働は、一方で、人間的現存在によって現実化されうる行為として存在するが、他方では、行為者による制御から分離されつつも、主体の存在論的な公理系との接合面を有する出来事として生起する。これらの審級は、互いの公理系や法を無効にしつつも、その作働は一方が他方の関数となることで実現する。脱構築という事象はこのように、事実的な行為と超越論的な出来事が構造的に交叉しあうという形式的な相関性の内にあって、自らの作働区域を反転させうる「過」超越論的な」(ultra-transcendental⁽¹⁴⁾) 現象である。

一・三 第三の審級には〈場所〉が見出される。

一・三一 場所とは、脱構築の作働の必然性がそこから到来するところの根拠である。

一・三一 この場所は、同時に、行為 出来事という遂行的な二肢構造の内部にあって、原理的に無記名のままに留まる脱根拠である。これは、一方で行為者を織り上げている存在論的な装置が場所論的なものを消去すべく組織化されており、他方で出来事の境位は自らの原因に位置するこの第三の類の錯認を経済的に定められていることによる。

一・三二 とはいえ、場所には、端的な不可能性という特徴のもとに、特殊な記入の権利が与えられる。

備考 通常の不可能性概念は可能性の単なる否定でありうる。これに対し、脱構築の場所論において導入される不可能性は、むしろ存在論的な様相性一般の否定という含意を担わされている。ゆえに、以下ではこれを適宜〈反様相的〉と特徴づける。

一・三三 さらに、行為 出来事としての脱構築との関係において、場所は脱構築不可能

表 1

構 制	様相的特徴
行 為	存在諸様相
出来事	可能-不可能
場 所	不可能 (≡反様相性)

なものとして再記入される。このことは、それが行為と出来事の可能性の条件に位置するとの謂いであるが、同時に、二肢構造との交叉により、場所は脱構築の内部にその反様相的な不可能性の条件として織り込まれているということでもある。

一・三四 場所の不可能性は脱構築の経験における空隙ないし欠如として現前する。このような欠如は、〈ねばならない〉(inévitable)という断片化された命法を典型とする諸々の形象によって記しつけられてきた。それらは、行為や出来事の可能性とその作働の必然性が、場所によって贈与され、定められている、という擬制的な真理を記しつける代補的な形象である。その不可能性は、脱構築的な遂行にとって現れざる現象として残余するところの、脱構築を命ずる高次の〈法〉の様相的特徴である。

備考 場所を指示する具体的な形象として、コーラ(χώρα)やツィムツーム(צומצום)などの古名や、〈無底＝深淵〉(abîme, abysse) / 〈そら〉(y)などの特有語法を挙げることができる。とりわけコーラは、脱構築に場を与え、それを生起させる空なる原基の範例的形象として読解されてきた。さらに、そのような空性の痕跡は、例えば〈そこに有るとすれば〉(s'il y a)という措辞を脱構築的な共範疇素(synkategorema)として定型化することで、その権利上の読解不可能性が不断に記しつけられてきた。

系 命題一・二五や一・三三のように、脱構築の可能性と不可能性の直交によって張られる経験位相の虚の实在性の特徴づけるのが、〈準-超越論的〉(quasi-transcendental⁽¹⁵⁾)という規定である。そして経験とは、準-超越論的な位相で不可避に発生するところの、文字素を原基とする準-物質的な媒体性⁽¹⁶⁾における移行(passage)の運動である。準-超越論的な経験において、範疇素や様相性の存在論的な値は未決にされる。それは、構制的には三つの審級の界面で生成する動的な相関性であり、場所から出来事への要請ないし命令、出来事から行為への存在論的

な繰り込み、という回付の経済を形づくっている⁽¹⁷⁾。

備考 脱構築は当初、存在論の「解体」という構想を引き継ぐ作業として導入された。けれども、この作業の具体的な展開は、脱構築という辞項に当初の課題範囲を踏み越えた超越論的な構制を与えることになった。右の定式化作業によってその構制の一般的な見通しが示されたはずである。

行為と出来事の構造的連結からなる作働は、脱構築における〈生〉概念によってその含意が新たに照射されるであろう。この概念の襞をより厳密に展開するなら、脱構築は準・自然的な技術性——〈根源的な技術性⁽¹⁸⁾〉——を内蔵する〈死生〉(la vie la mort⁽¹⁹⁾)の過程として現象してくる。〈準・自然的⁽²⁰⁾〉であるとは、経験の準・超越論性が自らの内に生動性とその形式的な否定としての死性とを共立させていることを謂う。技術性とはこの共立の非有機的かつ歴史的な特徴を指す。現象学的に記述された生動的現在にかかる機制ないし機械の範例である。脱構築における文字論的な範疇素は、この技術・歴史的な自然性を形象化したものに他ならない。

「テクストは生である⁽²¹⁾」。

ところで、「生は痕跡として思考されねばならない」(…)これは、生は死であると我々が言いうる唯一の条件である——「生と死のあいだの差異」(…)これが歴史と呼ばれているものである⁽²²⁾」。このとき、歴史とは時間経験の準・自然的な技術性を指す。

ここから、例えば次のような定義を与えることができるであろう。

定義 脱構築とは準・自然的な生である。

以上が、脱構築の準-超越論的な構制に関する定義、命題群、種々の補題からなる定式化である。

脱構築の経験は、それが遂行される個別の場面に定位するかぎりでは、古典的な存在論や出来事論の装置に限定された記述をそのつど許容するものとなっている。だが、それに特有の経験の分割可能な真理性は、二肢構造と場所からなる準-超越論的な位相構造に即して重規定的に呈示されねばならない。

二 準-超越論性に関する位相論の構築

脱構築を位相論的に構制された準-超越論的な経験として定式化することで、従来の多くの解釈が、脱構築に肯定的・否定的であるとを問わず、その経験が織りなしている複雑性を十分認知していなかったことがより明らかとなるように思われる。

二重性の事例——理由概念をめぐる

例えば、パトナムは脱構築の思想を各所で検討しているが、そこでは、哲学のいくつかの古典的概念をめぐるデリダの批判的な所論や彼の政治思想に対する賛意、また一部の分析哲学者たちによる脱構築の不当な戯画化に対する警告などが記されるとともに、次のような批判が繰り返し行われてきた。すなわち、「脱構築主義」は正当化や理性 \parallel 理由、合理性、知解可能性、といった概念を解除してしまうにもかかわらず、正しさの新たな規準を構築することに成功していない。したがって、それは妥当な「議論」を提出しえず、「規範的判断」をもたらすこともできない、それでいて空虚な誇張に訴えるといった欠陥を持つ、一種の自己論駁的な「懷疑論」に陥っているのだ、と²³。「問題は〔…〕デリダによる著述の争点が、「正当化」や「十分な理由」、「保証」(warrant)等々という観念はまずもって抑圧的な身振りなのだ、とするとところにある。そしてこの観点が、極端主義者たちに（とりわけロマ

ン主義的な傾向のある極端主義者たちに）支えと安楽を提供するために危険なのだ⁽²⁴⁾。

例えば、正義に関する次のような型の推論は、パトナムのこうした判断に合致すると見えるものの典型であろう。

「正義の理念」は破壊しえないものと見える。すなわち、その肯定的な性格において、交換のない贈与の要求において、承認のない、経済的円環のない、計算と規則のない、理由のない、あるいは統整的支配の意味における理論的合理性のない贈与において。人はそこに狂気を認めることができるし、さらにはそれを非難することさえできる。〔∴〕そして脱構築はこの正義に狂う。正義へのこの欲望に狂うのである⁽²⁵⁾。

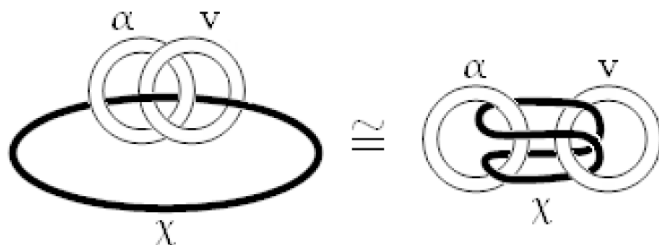
あたかも、ここには理由の交換を通じて「正義の理念」の仮説や批判を相互に協力的に吟味するという可謬主義の原理を採用する余地がないかのようであり、ゆえに問題をめぐって規範的な討議を運営するという所与の民主主義的な探究の可能性がここからは締め出されているように思われる。理の当然として、このように規定された正義理念は、井上達夫が指摘するように、「公共的な規範的討議の対等のパートナーとして他者を認知する視点を欠いている⁽²⁶⁾」と見える。ならば、脱構築とはひとえにこのような正義「である」というのか。否、であろう。

そもそも、右述の引用文を含む著書『法の力』という同一の資料体の別の箇所で、デリダはまさに規範的判断の要となる「理由」の概念を積極的に用いていた。すなわち、正義を考察するにあたり、特定の固有言語を——公用語として登録された、少数者への「強制」の記憶が大抵の場合忘却されている制度の言語を——用いることは、その暴力的な起源にもかかわらず、「諸々の根本的な理由によって、正当であると思われる」。他方で、特定の公用語を理解したり解釈することのできない者を、当の言語だけによって裁判にかけることは不当である。このような不正義は、共同体の構成員全体が「一つの言語を全般的に用いることができ、語る動物としての人間である」ことを

前提していることから発生する。ここで必要なのは、他者に知解可能な固有言語を用いることである。とはいえ、厳密に捉えるなら、そもそも特定の固有言語を人々が普く共有するといった「理想状況は決してありえない」だろう。しかも「人間」ということで、実のところ「成人・男性・白人・肉食」なる者を意味するという「時代」は、「昔のことではなく、終わってもいない。〔…〕人類の中には、主体として承認されず、この動物の取り扱いを受け多くの「主体」がいたし、今もなおいるのである⁽²⁷⁾」。

ここでの「理由」が意味しようとしているのは、おそらく次のことである。すなわち、脱構築による正義理念の探究は、少なくとも或る審級では、固有言語を他者にとって知解可能、なように使用しなければならぬ。そうであれば、この正義の探究もまた、条件が十分よい場合には、その真理が「保証された主張可能性⁽²⁸⁾」を必然的に伴うのである。しかし、この型の主張可能性を或る制度・状況内で権利上かつ実効的に行使しうるのは、様々な所与の民主主義において、実のところ今日もまた特定の「人間」であり続けているのではないか。これは脱構築の動機を引き継ぐ批判的人種理論が主題化する自由主義的法における一つの欠缺に重なる⁽²⁹⁾。

このように、『法の力』における理由概念は、二重の使用域を与えられている。理由は行為の審級で必要とされるが、出来事の範域において解除される。パトナムや井上の批判は後者の使用域における理由概念の挙動を取り上げることから古典的な正当性を持ちうる。とはいえ、脱構築の理由概念は一つ以上の使用域を与えられることでそれに特有の非古典的な真理へと関係しうるのであれば、それらの批判は、脱構築それ自身に対するものとしてのかぎりにおいて、正鵠を得ていない。しかも、デリダ自身はこのような二重の構制を明確にする作業に、多くの場合簡略的にはあるが、しばしば取り組んでいたはずである。もっとも、脱構築を積極的に捉える解釈者たちによって、この二重性が極めて頻繁に看過されてしまう——脱構築の作業を「読解」という行為に還元してしまうのはその徴候である——のは、おそらくその構制が我々の認知に根本的に抵抗する型の論理——関係の論理としての原算



術³⁰⁾——とともに作働しているからなのである。

位相論の導入

ところで、理由概念は哲学の伝統性の中で理性や根拠などの意味と翻訳において可換的であるわけだが、これはそれらの概念がロゴスからラティオを経て遺贈されたものであるからに他ならない。『法の力』第一部の推論において発生している理由概念の二重性を、〈ロゴス中心主義〉という構制の内に翻訳すると、それはロゴス \parallel ラティオ概念に対する〈関係なき関係〉を形づくる逆説法的な推論を支えているのである。すなわち、ロゴスないしラティオなしに、同時に、ラティオとともに——このような事態は、同書における理由 \parallel ロゴス概念の位置を哲学的に理解する際にはアポリアとして認知されるわけだが、にもかかわらず、脱構築はむしろこうしたアポリア系を真理論に組み込むという特有の推論をそこで展開しているわけである。したがって、いわゆるロゴス中心主義の脱構築は、ロゴスへの関係なき関係において遂行されるのだと言わねばならない。

なるほどこの種の言明は、議論や合理性に関する所与の規準——例えば正当化、検証、反証などを介した真理の受容可能性、信念群・知覚・行為のあいだの整合性など——からすれば、妥当な真理要求を持ちえず、そのままでは偽の値を取るものであり、また行為者を構成しえないものであろう。けれども、脱構築におけるこの現前不可能な経験の真理性は、例えば図示したような位相論を手引きとすることで、形式的に知覚可能なものとなるはずである（記号 $\cdots \alpha \parallel$ 行為、 $v \parallel$ 出来事、 $x \parallel$ 場所³¹⁾）。幾何学的な位相論

(位相幾何学) や結び目理論の対象ともなるこの図形は、閉曲線をなす三つの弦によって構成されている。それらは、全体としては分離不可能な仕方であっているが、任意の二つの弦はどの場所でも絡んでおらず、互いに分離されうるものとなっている。したがって、連結の全体は三つの弦のうち一つが外れるだけで解除される。言い替えると、任意の二つの弦は互いに絡みあう関係を持たないが、同時に、一つの弦の交叉によって形成された全体においてのみ、その同じ二つの弦は互いに絡みあう関係を持つ。全体の連結は決して双数的ではなく、つねに第三の弦が双数的な交叉の縁に介入することで維持されている。脱構築という事象に帰せられる関係一般の論理——対立する範疇素を共立させる原算術——は、このような位相論に翻訳可能であり、事実デリダ自身がいくつかの箇所では間歇的にはあるがそのような記述を行っていた³²。言うなれば、脱構築とは、行為 α と出来事 v という異質な審級によって分割された経験であるが、この二重性は脱構築不可能な場所 x による横断を $A \cdot \text{プリアリな条件}$ としているわけである。

『法の力』第一部における理由概念の二重性は、この位相論的図形の交叉態を集合論のベン図に見立てること、その二重の位置を正義との相関性において次のように指定することができる(ここでは差し当たり場所との交叉を度外視して考えることにする)。すなわち、理由とともに実行される行為としての脱構築は差集合 $\alpha \setminus \beta$ によって表示され、理由なしに実現される脱構築としての正義は、出来事としての正義と行為としての正義とを、その遂行態において分有しているのであるから、差し当たり α と v の共通集合 $\alpha \cap v$ によって図示される(これらの分類はそれぞれ、第三節で図示する区域 μ と p に対応するものである)。

位相論的方法論的位置づけ

精神分析家のラカン³³は、いわゆる〈無意識〉の構造に表象を与えるべく同型の位相論的図式を導入し、そこから

特殊な理論化と思弁を展開していた⁽³³⁾。数学的書字法への参照を伴う各種の分析素は初期のセミネールからすでに用いられていたが、それらによって精神分析的な語らいの数学化や自然科学化が企てられていたわけではない。このことは、科学ないし学問——哲学も含めて、論証に携わる書字の形態——そのものが、魔術や宗教とともに、昇華の一様式として分類されていたことから明白である⁽³⁴⁾。これら昇華の三形態は、自らの世界へと固有の真理を現出させるが、それによって昇華の〈原因〉に位置する真理は失われる。他方で精神分析は、この失われた真理をものとして現出させるというのである。それゆえ、精神分析そのものが昇華の一形態として含まれることはない。にもかかわらず、いくつかの箇所、ラカンは無意識の構造と理念化された数学的な記号体系を一義的に対応させることがあった⁽³⁵⁾。分析素のこのような学問論的位置づけが示しているのは、自然科学と精神分析の対象領域間の区別と移行に関する問題である。ここには科学主義的な批判とは異なる視座から検討する余地が残されている。

位相論の定性的特徴と無意識の構造を同一視することは、例えば計算機の中に実現された人工生命を生命そのものと見なす発想と基本的に同型である。つまり、計算論的に構築されたデータ構造が示す力学的な振るまいにおいて生命の実例が与えられている——なぜなら、生命とは計算機であるから——と見なすように、〈言存在〉を構造化している無意識なる歴史的所産の等価物が、ユークリッド空間のみならず集合や関数が定性的理論の中で一般化された位相論的な概念体系の中で与えられているというのである。

とはいえ、生命の本質は計算機上に構築された模型の理解を通じて計算論的かつ直観的に捉えることもできるという主張は、生命とは計算機であるとは見なす還元主義的な主張と同じものではない。例えば、現代の理論生命科学における〈構成的〉(構築的 [constructivus]) 研究が計算機実験において人工的な模型を用いるのは、計算機としての生命システムを人工的に再現するためではなく、その目的はむしろ、計算論的な条件のもとで自然現象の論

理を仮説的に構築し、そこから理解や記述という不安定な観測過程を経由して、生命システムとのあいだに共通する普遍性クラスを実験的に探っていくことにある³⁶⁾。

同様に、位相論が無意識の構造や脱構築の経験を理論的に記述可能なものとするのであれば、おそらくそれは構築論的な模型としてであろう。それは、無意識や脱構築の特徴を示す共通クラスの集合を位相論的な模型として仮説的に構築し、次いで事象と模型とを往還する内面的かつ外的な観測³⁷⁾を介して、事象それ自身の規則や普遍性を実験的に特定していく、という構築的手法の一段階として組み込まれるのである。

本研究が導入する位相論的図像は、脱構築的な事象の集合に共通する構制上の特徴を抽出し、それを位相論的な論理によって特徴づけることで構築された、仮説的な模型である。したがって、位相論的な関係が脱構築の経験に幾何学的な水準で対応することがここで想定されているわけではない。これと同様の方法論的な位置づけは、おそらくラカン派の位相論や分析素についても可能であると推定される。

脱構築の位相論的構制

脱構築という事象は、行為 α と出来事 v の審級が位相論的に交叉しあう二重体として構制されている。両審級は互いに原理的に異質であり、相互に蝕をなす関係にあるが、にもかかわらず位相論的に分離不可能なものとなっているわけである。脱構築は、この〈異質性における分離不可能性³⁸⁾〉のゆえに、一方では主体の公理系に根差し、他方では所有性の形而上学を超過する出来事として経験されるが、さらに行為と出来事の共通集合において両審級の特徴を分有する。脱構築という経験の真理はかくして、〈一致〉(adequatio)という真理の古典的な定式の否定として、すなわち〈関係なき関係〉という逆説的な形象を範例とするであろうそれ自身における——虚の実在性を帯びた——肯定的な〈不一致〉(in-adequatio)として再記入されるのである。

例えば、正義理念が「権利としての正義」と権利から峻別された「正義それ自身」のあいだを振動し、あるいは主権者による法創設的な「決定という正義」が、「真実のところ、決定という出来事」として——存在論と出来事論の交叉部に——到来する、といった現象の移行的な真理性がそれである⁽³⁹⁾。「法と権利の差異、正義と権利の差異、正義と法の差異は、無底の上で開かれたままに留まっている⁽⁴⁰⁾」のである。

ところで、「無底」(abime \vee α + β uotoc)——深度ないし底部の否定——とは存在論的な支持体や基底材の否定であり、場所 χ の異名である。ゆえにこのテーゼを構制論的に次のように翻訳することができるであろう。すなわち、行為と出来事の差異は場所の上で開かれたままに留まっているのだ、と。別言すれば、脱構築的作働の可能性は、それが脱構築不可能な場所において有ることによって始めて、いわば与えられているのである。だが、このような贈与に関する記述は、ロゴス＝ラティオの区域において、その語の規範的な使用に転義を施した一種の比喩に留まる。この区域内で場所の贈与について合理的に言明しうるのはおそらく、脱構築の作働はどこから来るのか、あるいはそれがそこに〈於てある〉ところとは何か、という問いなどに限定されるはずである。

脱構築はどこから来るのか——権利連関に縮減しえない高次の法からの厳命、真理を証言するという大学の使命、秘密を伝承するという或る種の芸術的なものの課題、そして無条件的な理性による主権性の再記入が、行為者の意図や動機群には還元不可能な、それでいて行為者を介した出来事として遂行されねばならない、という要請として経験されるのだとすれば、その力はどこから到来するのか——「他者から来る⁽⁴¹⁾」と言うことは、今日もまた無関係ではない或る画定された〈時代性〉という仮説の中で、おそらくは一定の合理的な正当性を持ちうるが⁽⁴²⁾、それによって脱構築の要請に関する真理性の全てが汲み尽くされてしまうわけではない。西田の場所論的な考察をも開始させたこの〈於てある⁽⁴³⁾〉ところの必然性をめぐる問いは、ラティオの秩序を超過することによって記述不安定性の負荷を遥かに増大させるからである。

場所 χ の範域で課題となるのは、脱構築に特有の真理性を代補する擬制としての高次の法を作り出すことである⁽⁴⁴⁾。ここから、我々はさらに宗教的遺産の無神論的な伝承という作業に踏み入ることになる。

三 脱構築とは何か——定義への戦略

脱構築とは何か——これは、伝統的には最近類と種差から得られる〈定義||限界〉(ὁρισμός)への問いである。それは、問われているものの本質を規定し、その地平を限定する(ορίσεν)という作業を指定している。これに対し、脱構築の定義をめぐる初期のいくつかの応答において、定義への問いは〈脱||限定〉(de-limitation)をめぐる課題へと変形されている。この操作子は、連辞符の挿入によって表示されている通り、「限定」という語の日常的概念が二重化された使用域を与えられている。つまり、それは定義や本質という観念について、一方ではその意味を限定することで再固有化しつつも、他方ではそれらの制約を解除する。言い替えば、定義や本質の概念を、それらが埋め込まれている伝統性から引き離すことが目指されるわけだが、同時に、当の歴史的もしくは体系的な必然性のゆえに、探究の未踏部分では、それが障碍となっていることが判明しているであろう当の諸制約に、正當かつ厳密に準拠することが戦略的に求められるのである。したがって、脱構築をめぐる定義への問いは、脱限定的な効果において、本質的な定義を与えることと、定義や本質を超過する概念を記すことという、二重の解釈なし読解をもって応答されねばならない。

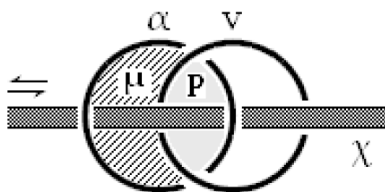
脱限定という操作の原型は『存在と時間』の第六節に記されている。「解体」の歴史的な条件であるところの、存在の歴史の「諸・限・界」(Grenzen)をめぐる作業がそれである。他方で、二重性の動機そのものは構造主義的な諸研究から徴取されている。デリダが初期に著わしたいくつかの論文には、構造主義的な意味における「二重の使用域 (registre)⁽⁴⁵⁾」、「二重の公準⁽⁴⁶⁾」、「二重の読解⁽⁴⁷⁾」といった幾何学主義的な概念が批判的に取り上げられてい

るが、最初期の論考「力と意義」（一九六三年初出）が単行本『エクリチュールと差異』（一九六七年）に収録されるに際して追加された或る条りを読むと、それらの概念がマラルメの形象——二重の解釈、二重の書物——を接木されることによって脱構築的な音域へと徐々に移行させられていく過程が聴き取られるはずである⁽⁴⁸⁾。

このような作業に従事していた時期、デリダは自らの学をむしろグラマトロジーとして構想していた。この名称には、いわば文字素 (typographe) の審級へと逆還元⁽⁴⁹⁾された経験の過剰超越論性が圧縮されている。Grammatologie という語の字義性には〈思弁文法学〉(grammatica) の古典的な響きが依然保持されているわけだが、同時に「文字学」とでも訳出されるべき新たな使用域が付与されている。この学は極めて包括的な研究として構想されており、哲学はもとより、構造言語学、記号学、先史人類学、技術考古学、神学、精神分析、情報科学、等々の組織的な連携のもとに成立している。この全包括的な特徴を可能にしているのが、〈現前の形而上学〉の歴史性に関するハイデガー主義的な仮説である。

この意味での〈形而上学〉とは、かつて〈西洋的〉と限定された或る型の思考や学としばしば可換的である。ゆえにグラマトロジーは、論文「記号学とグラマトロジー」（一九六八年⁽⁵⁰⁾）によれば、「科学性的概念とその諸規範を、存在神論、ロゴス中心主義、音声論主義^{フォノロジズム}に、結びつけている全てのものを、脱構築しなければならない」。ところで、この脱構築の作業ないし「学の古典的な企投の踏み越えは、前学的な経験主義のうちに再降下するのを絶えず回避せねばならない。このことは、グラマトロジー的な二重の使用域を想定している」。かくして、グラマトロジーの二重性が次のように記述される。

一度に (à la fois)、形而上学的な実証主義や科学主義の彼方に行かねばならず、かつ、学の起源以来、学の定義と運動にとって重みのある諸々の形而上学的な仮説系から学自身を解放するのに寄与しているものを、学の



「一度に」「同時に」「かつ」という一連の措辞は、行為・出来事という二肢構造の形式的な指標である。引用文に先行する箇所でも、同様の「一方／他方で」(d'une part / d'autre part) という辞項が斜体によって強調されている。この種の表現の半ば形式的な反復と意図的な強調は、デリダが極めて早い時期から、かつその後も継続的に、これらの共範疇素的な措辞を脱構築的作業の二重性に対する注意を喚起するために方法的に操作していた、ということを示唆するものである。

ここでの二重性は、次のように位相論的に配分することができるであろう。すなわち、一方における「実際のな作業」、「記入」、「記し」、「厳密性」などの特徴は、行為者の意図や目的性に依然として帰属する所有性の形而上学の閉域 μ に、他方における、「彼方」へと方向づけられた「脱・限定」、「解除」、「自由」といった特徴は、行為者の範域 α に属しつつも、そこから「ロゴス中心的な閉域を超過する」という出来事性によって記しつけられよう、行為と出来事が交叉する共通集合 p に、それぞれの位置が指定される。デリダは、J・L・オーステインの発話行為論の研究を開始した一九七〇年代以降、この区域 p を解釈・変形された遂行態の概念によって記しづけることになる。

後続する条りでは、この二重の使用域が、ソーシャルやイェルムスレウの思想の中にも現前していることが指摘される。つまり、脱構築という作業は、デリダによって署名されたグ

ラマトロジーにおいてのみ占有されるものではなく、反対に、他者たちの資料体の中にその痕跡が分有された、文字通りに〈奪所有化的〉な運動なのだ、ということである。「記号学研究をめぐる全ての命題の内に、もしくは全ての体系の内に〔…〕数々の形而上学的な前提が批判的な諸動機と同居している、とア・プリオリに言われうる」。この「ア・プリオリ」は、グラマトロジーの法からすれば、「形而上学的前提」が「或る地点までは、同じ言語活動」に、つまりは異なる固有言語のうちに、つねにすでに組み込まれている、という「事実」のゆえにである。

かくして、グラマトロジーの、そして脱構築の定義に対するこの最初期の応答は、次のようなテーゼによってまとめられることになる。

グラマトロジーは、おそらく、新しい学ではなく、新しい内容や周到に規定された新しい領域を担う新しい分野なのでもなく、むしろテキスト的分有という警戒に満ちた実践であるだろう。

行為を規制する主体の公理系は、標準的なもしくは「新しい」学一般のみならず、脱構築にとっても明らかに必要な作業であり続けるが、脱構築に特有の作業区域はこの公理系を踏み越えてもいる。グラマトロジーの「実践」は、所有性の形而上学に属していると同時に、すでにその閉域から出来事の境域へと遂行的に踏み越えつつある。「実践」という行為的概念はこのように二重の公準によって分割されているわけだが、それはグラマトロジーが行為者性と出来事性の排反しあう本質によって分有されているということなのである。

備考 さらに、ここに言う「実践」というヘレニズム的概念は、おそらく〈警戒する〉(ὑποφυλάττειν)というヘブラ

イ的な觀念の側から固有の音域を省略法的に与えられている。脱構築の資料体において、ひとは警戒や覚醒に類す

一群の語彙 (vigilant, veiller, garder, etc.) にしばしば出会うことになるが、これらの辞項は標準的な語法に比して不規則的に使用されており、或る解釈的な重みを喚起する概念的な位置価値を与えられている。このとき、警戒するとは、神との〈契約〉(c^{ベリト}on)——絶対的な〈分離〉(カ^ドド^シン)——という形式を取る〈関係なき関係〉——の維持とその履行を見張ることであり、契約をめぐる不可能な証言を行い、神的な関係を絶えず覚醒させるという宗教的な営為へと、伝承の連関を介して合流する。ユダヤキリスト教典の一つ『雅歌』の或る条りを引用しつつ、エックハルトは「見張る者」(w^ワalter)をして「使者」(e^{エン}gel)である」と註釈している⁽⁵¹⁾。「見張る者」(w^ワach)とは、ヘブライ的な脈絡にあって、しばしば「警戒する者」(w^ツach^ツad)と同義である。デリダが虚構的に記す次のような一人称的文章は、このような布置の中にそれが書き込まれていることにより、固有の歴史的な意味を帯び始める。「私は古代の使者に、使いに似ている」(「…」とはいえ、自分が見張っているものを測り知ることのできない無力な伝承者だ、そして私は走る、秘密のまま残らねばならぬ報せを運ぶために、私は走る、そしていつも私は落失している⁽⁵²⁾)。このような特有語法によって記入されているのは、その射程が「広大で無制限の作業」と誇張法的に規定された脱構築の課題が「自由にかつ厳密に」伝承されるためには、その実践を行為と出来事のいずれかに限定しようとする哲学の限定的な傾向性に対し、脱限定の技術をもって対処すべきことを絶えず呼び起こす必要が残り続ける、ということであろう。哲学とユダヤ思想という二つの遺産を、作業の或る特異な地勢においてこのように接木的に伝承するという動機への署名ないし連署を、デリダは論考「力と意義」や二つのエドモン・ジャベス論などのいくつかの箇所ですくから暗示的に記入していた。

四 出来事としての脱構築

脱・否定の論理

脱構築の定義をめぐる問いを直接的に取り扱っており⁽⁵⁵⁾、かつ出来事の審級に強く定位する仕方での応答を試みているのは、比較思想・イスラーム研究で著名な井筒俊彦への公開書簡という形で著わされた、デリダの短篇論文「日本の一友人への書簡⁽⁵⁴⁾」(以下『書簡』)である。そこで問題となっているのは、deconstruction という言葉の日本語への「可能な」翻訳に関する序言を提示することであったが、「そのために」デリダが最初に立てた記述と推論の指針は、問いの形式を、deconstruction が「何であるべきではないか」という「否定的な規定」からなるものに変換したうえで、この言葉が理解され翻訳されるのをむしる避けるべき意味内容の方から画定していく、というものであった⁽⁵⁵⁾。これは、修辭的に言えば——ただし、修辭主義的な技巧としてではなく、動機群の外部から思考を形式的に作働させる文法^{グラマトロジック}論理的な機械によって哲学が組織化されてきたことを考慮すれば⁽⁵⁶⁾——先取法の否定的な運用と冗語法によるその反復、という二つの手法を基礎とする、すでに定型化され、ゆえに脱神秘化された否定神学的な戦略である。この方法化された〈否定ノ道〉(via negativa)は、哲学の類型的な判断に対して否定的な規定を先取法的に配列していくことによってこそ、逆説的に、「修辭の彼方で」、「経験それ自身が無言のうちに自らを示す」ことを目指している。したがって、それらの「形象」は、「それ自身の彼方を指し示すことに仕えた後に破壊される⁽⁵⁷⁾」はずである。この手法は、後に精神分析における〈否定〉(Verneinung)概念の徴取・変形によって、〈脱・否定〉(de-négation)の論理として形式化される⁽⁵⁸⁾。「伝承された負債を脱・否定として肯定すること、ないしは引き受けること、これこそが、否定神学、真理としての、系統化の二重の真理である⁽⁵⁹⁾」。

論題の核心へと足早に進むべく、『書簡』の過程を圧縮して考察の諸帰結のみを取り上げれば、脱構築とは、第

一に、「分析でも批判でもない」。つまり、それは「単純な要素や、分解不可能な起源への退行ではない」。むしろ、一般的ないし超越論的ないずれの意味においても、「κρίνειν や κρίσις (決定、選択、判断、識別) の審級」を問いに付すことこそが、脱構築にとつての「本質的なテーマ」もしくは「対象」となるからである。第二に、脱構築は「方法」ではない。それは、例えば「読解や解釈の方法論」とはなりえない。脱構築は「規則と移調可能な手続きからなる総体」ではないばかりか、そもそも「主体に帰属せず」、しかもそこには何らかの「受動性よりも受動的な」事象が有るために、能動的であるとも受動的であるとも言えないからである。のみならず、脱構築とはそもそも、行為者によって担われる類の「行為や操作ですらない⁽⁶⁰⁾」と断言される。

こうした必要最小限と考えるいくつかの脱否定的特徴づけが補助線として引かれたのち、『書簡』の語調は一転し、脱構築に関する諸々の肯定的な記述が矢継ぎ早に提示されることになる。

脱構築は生起する、それは一つの出来事である「…」〈それ〉は、自ずから脱構築する (Ça se déconstruit)。この〈それ〉は、何らかの自我論的主体性に対立するといった非人称的な事象ではない。それは脱構築においてある (C'est en déconstruction) 「…」。

脱構築が、〈それ〉が生起するいたるところで、何らかの事象＝ものが有る (Il y a quelque chose) いたるところで生起するのであれば「…」思考すべく残されているのは、今日何が起っているのか、ということである。「…」私はこの問いに対し、単純で形式化しうる応答を持っていない。私の全ての試みは、この途方もなき問いを解明する試みである⁽⁶¹⁾。

「同者としての全き他者」——範疇素の回付構造

脱構築が出来事「である」という肯定的な命題を形式的に支えているところの、事象Ⅱもの、そしてそれ。独立的には意味を持ちえないこれらの空虚な指標は、ここでは、古代ギリシア哲学からイスラーム古典思想、スコラ主義、カント認識論、現象学、精神分析、などとの組織的な連携のもとで、いわば超範疇的な可逆性を帯びた範疇素として機能させられている。この解釈の可能性の条件には、逆還元によって開示された辞項間の〈回付〉(renvoi)という機構がある。回付の構造において、諸辞項は表象主義的な主体性なき「表象」や「記号」として絶えざる代補的な遊働の内に置かれることになる。

この表象の遊働において、起源点は把握しえない。「…」一方から他方への無限の回付は有るが、もはや源泉は無い。単純な起源さえもはや無い。なぜなら、再帰されるものはそれ自身において二重化されるからであり、単に自己の像を自己に付加することではないからである。「…」思弁の起源は一つの差異となる。自らを視ることができるものは一者ではない、そして起源をその表象に、事象をその像に付加する法則とは、まさしく一プラス一は少なくとも三である、ということなのだ⁽⁶²⁾。

辞項の代補的連鎖の中で、計算可能な一義性や多義性に縮減しえない「一種の意味論的な蜃気楼⁽⁶³⁾」が効果として生じる。これは一点性において措定されえない散種の経験である。そもそも、逆還元された文字性の次元に「原子は無い (il n'y a pas)⁽⁶⁴⁾」。反対に、そこには回付的に二重化された、後に言う〈憑在論的〉な経験だけがある。

同様に、適宜変更を加えることで、この回付の機構は、存在・神論における超範疇的な根本諸概念を構造化する

経済として、概念的に拡張することが可能となる。デリダはこの拡張作業を、初期レヴィナス論などで行っており、同時期の論文「繫辞の代補」ではより徹底的な検討を行っていた。前者の論考「暴力と形而上学」のいくつかの箇所て記述されているのは、存在の超範疇性が二つの範疇素〈同〉と〈他〉との可逆的な関係へと移行する原算術的な過程である。結論的な部分のみを引用すると、「思考と存在、思考と他者は、同者である——この同者は、同一者や一者、等しきもの (l'identique ou l'un, ou l'égal) のことではない、という点を想起しておこう」⁽⁶⁵⁾。ところで、「我々が存在について言っていることは、同者について言いうるだろう」。すなわち、

同者は一つの範疇ではなく、全ての範疇の可能性である。「∴」同者は差異の否定ではないし、存在もまた「差異を否定しない」⁽⁶⁶⁾。

このテーゼは差異という範疇素の機能を同において否定するものではない。〈同〉の可能性はむしろ、その内に〈他〉の可能性をそれとの差異において共立させているのである。かくして、同ならびに他という範疇素は、存在の超範疇的な特徴を分有するそれ自身において二重化された事象として再記入され、回付構造を推論的に操作する原算術の機能が与えられることになる。以下、この型の操作子を準-範疇素と規定し、古典的な各種の範疇素から区別する。

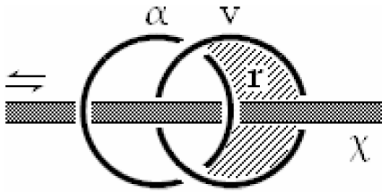
例えば、現象学的な場面における「事象そのもの、直接的現前、根源的知覚、という蜃気楼⁽⁶⁷⁾」は、時間化の普遍的な形式における同者の内に解放された他者であるが、この他者なる事象はと言えば、「差異の同性を告示する、差延としての同者」という知覚的に現前不可能な経験なのであった。ところが「哲学は」——そして、同と他を存在論的範疇として用いるあらゆる思考は——「同者に対して盲目となる」⁽⁶⁸⁾。だが、むしろそこには「同者と

いての全き他者^{⑥9}」だけが有るのだと言わねばならない。

事象・もの・それ——出来事の準・超越論性

同者としての全き他者という原算術的な二周期解の記述的定式は、出来事の現前不可能な歴史性を代補的に再記入する形象である。この同者に対する盲目は、同||他という準範疇的な作働が、思考の体系から規則的に排除されるということ、つまりは事象であり、存在|定立論^{⑦0}から吐き出されることでその構制に組み込まれるものであることによる。

準範疇化されたそれは、『弔鐘』（一九七四年）での一節を端緒として、〈準・超越論的〉という語のもとに再導入される。



仮に、同化しえないもの、絶対的に消化しえないものが、体系において基礎的な、あるいはむしろ無底的な (abyssal) 役割を果たしているのだとしたら、無底が準・超越論的な役割を果たしているのだとしたら、どうであろうか〔…〕いつでも、体系から排除された要素が、体系の可能性の空間を保証しているのではないだろうか。超越論的なものはいつでも、厳密に、超範疇的なものであったのであり、体系の内的なかなる範疇にも包摂されえず、形成されえず、終結させられなかったものである^{⑦1}。

同時期に書かれたカント論「エコノミメーシス」には、事象の準超越論性に関するより圧縮された次のような命題が読まれる。

或る唯一の「事象」もの」だけが同化されえない。それは、したがって、超越論的なものの超越論的なもの、超越論化可能ではないもの、理念化しえないものを形づくるであろう⁽⁷²⁾。

「体系から排除された要素が、体系の可能性の空間を保証している」とは、出来事としての脱構築が「主体に帰せず」、「行為や操作ですらない」という事態を、場所論的な構制へと再写像したものである。このような〈事象それ自身〉は範疇の古典的な挙動に抵抗する。〈それ〉は、次のような仕方で三つの区域に分有されている。

すなわち、第一に、行為者への帰属を否定されるべき自己脱構築的な生起は、存在論的な原理からの干渉を欠いた出来事の純粹な範域における事象それ自身 r の出来事性として経験される。行為や操作の脱否定はこのように、初期の脱限定に比して出来事の遂行性へと一層定位する方向で展開されている。しかし、第二に、理の当然として、出来事の記述といえども、少なくとも或る地点までは「预料」ないし「目的論的な必然性の措置⁽⁷³⁾」によって実行されるのであり、主体性の閉域 α によって規定されうる人間的な行為者の実践なのである。「目的性ないの奇妙な戦略⁽⁷⁴⁾」は、区域 α の目的性と界面を共有する範域 r の縁からのみ、その準超越論的な効果を産出する。第三に、事象概念は主体によって出来事性を担われると同時に、「無底的な役割を果たしている」。すなわち、事象とは、出来事論的な到来者を記入する能記であると同時に、場所を記す準範疇素でもあるわけだ。このような場所論的特性は、出来事 v と場所 x の共通部分 $v \cap x$ から区域 α を除去した集合によって形式的に限定することができるであろう。

五 脱構築の場所——要請・法・神性

構造的残余としての場所

残された課題は、脱構築の要請がどこから来るのか、という問いを展開することである。

この問いは、例えば次のような形でしばしば暗示的に提出されていた。

出来事は、そのようなものがそこに有るのだとすれば、可能なものの現実化であってはならず、行為への単なる移行や、「…」[可能性の条件]に依拠した力動的なものの過程、等々であってはならない。「…」出来事は、不可能なものとして告示されねばならず、またはその可能性が脅かされねばならない (*il faut*)。

しかし、なぜ、この「ねばならない」が要求されるのか。この必要性の位格、外見上は矛盾した、結局のところ二重に義務的なこの法の位格は、どのようなものであろうか。そこから可能なものをなおも不可能なものとして再考せねばならないであろうところの、この「二重拘束」とは何か⁽⁷⁶⁾。

この二重拘束の法は、予め限定するなら、「現存しない」空なる場所から来たる法であり、存在論的には「何も与えない⁽⁷⁶⁾」であろうコーラの、厳命である。脱構築はそこにおいてあることで始めて命法や希求法 (*optativus*) の形式を取る高次の法からの無記名の力を受け取ることができるというのである。

プラトニーデリダがコーラという名によって指し示しているのは、第一に、「ロゴスの規則性」を組織化している「極性一般の秩序」——そこには脱構築の二肢構造も含まれるであろう——を誇張法的に問い直す余地が必然的に残り続ける、という構造的な残余をめぐる問題である。コーラの形象は、ミュトスとロゴス、生成と存在、存在論

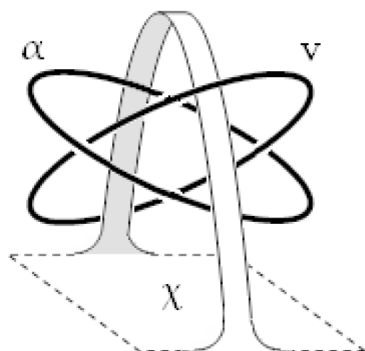
と出来事論、等々という諸ジャンルの地平に規則的に属することのない或る「第三の類」として現れる⁽⁷⁷⁾。それは、「分離」(χωρισμός)の觀念と語根 χω-を共有するその文字性の通りに、「あらゆる個別的なものから自らを分離するもの、そういう仕方でもさに他のものを許容し、それに「場所を空けて」退くもの⁽⁷⁸⁾」である。日常的觀念における場所とは存在者によって占拠されうる基底材であり、畢竟「存在論的なものの内に受容されうる存在者⁽⁷⁹⁾」であるが、コーラとはそのような存在的・存在論的場所をそこに開く一方で、自らはそこから引き退いていくという、原事実的な事象それ自身の擬制的な名である。そのようなところは質料的な空間ではなく、空間の空間性という形相でもない——しかし同時に、「アポリア的な」仕方で双方に「分有している⁽⁸⁰⁾」。

コーラのもう一つの文字素 -ρα は、バンヴェニスト・デリダが推定するように、*periv* (流れる) から派生している⁽⁸¹⁾。この仮説は、原算術的な律動 (*póthos*) である範疇素間の〈振動〉(*oscillation*⁽⁸²⁾) が、ロゴスの規則性の下方で発生している、という構制の内に織り込まれている。

この地盤は *σπokeivon* ではない⁽⁸³⁾。この、下なるものの下なるものは、「脱構築的な」〈入れ子状態〉(*mise-en-abyme*) にはなく、むしろ「脱構築不可能な」無底をめぐる思考に導くのであり、無底は「こゝ」ではいくつかの場所もしくは非-場所のひとつであろう⁽⁸⁴⁾。

要請という代補的擬制

第二に、このような現存しない場所の原事実的な所在こそが、脱構築に固有の可能性を贈与し、その現実化を要請するところの、脱構築不可能な条件として分節される。ユークリッド幾何学における要請Ⅱ公準は、演繹的な体系化の出発点となるであろう明らかと思われる事実を指しており、その原則に関する証明は付されていない。脱構築



築の要請もまた、そこから始めて脱構築の権利が導出され、正義が可能となるものであり、それに関する証明が与えられるわけではない。にもかかわらず、この要請が来たる源泉に場所の形象が指定されるのは、コーラをめぐる思弁がいわば人知を超えた事象を発見すべく代補的に導入された「ありうべきロゴス」(εἰκὸς λόγος⁽⁸⁴⁾)だからである。それは、「あらゆる擬人法の彼方で」読解されるべき、指示対象を持たぬ擬制的な名である。ゆえにその名は、「直ちに名より多くのこと、名の他者、端的には他者を言い、まさにそれらの突発をこそ告示する。〔…〕人称に対して、それはいまだ異他的なままに残る⁽⁸⁵⁾」。

コーラは厳命する。人称性と非人称性の秩序の下方から、である。デリダはその要請を、ソクラテスという人間の活動に仮託しつつ物語っていた。ソクラテスの活動は、コーラからの「呼びかけ」、「靈感」から発してこそ、「自らの名に応答する」ことができる、という積極的な解釈がそれである。ソクラテスの言葉は、「第三の類のうちに、場所なき場所という中性的空間のうちに、すなわち、全てがそこにおいて記しづけられるが、「それ自身において」記しづけられることがないであろう、そのような一つの場所のうちに、到来する」。そのような言葉を、人は「自らを消去する」ことによって始めて伝令することができるというのである⁽⁸⁶⁾。

このような擬制的形象は、脱構築的アルシーヴの伝承において、例えばヘブライ的な場所の観念である〈タイムツーム〉を描写する諸々の一神教的な形象へと換喩的に横滑りしていくはずである。「神が自らを、自らのうちに、退引させる、場所を他者に、創造と被創造者に明け渡すために。〔…〕タイムツームとは、距離の創造であり、厳密に言えば、分離としての、超越としての宗教の創造である⁽⁸⁷⁾」。

場所・移行・道

コーラやツィムツームが脱構築不可能であるとは、それが行為・出来事という二肢構造にとつての可能性の条件であることを謂う。この不可能なものそれ自身は、しかし、無条件の要請である。この無条件性は、脱構築の倫理法のおよび政治的な場面において、正義、贈与、厳命、力などとしても語られてきた。「脱構築不可能な正義と贈与、あらゆる脱構築の脱構築不可能な条件」、そして「正義というこの脱構築不可能な厳命」、これらに対しては、「いかなる構築も、いかなる基礎づけも、不一致的であらざるをえない⁽⁸⁸⁾」。倫理・政治的なこれらの遂行的作働は、反様相的な不可能性との相関において、行為・出来事・場所の共通集合 $\alpha \cup \nu \cup \gamma$ として示され、その不一致的な真理性は二肢構造と場所との場所論的差異であることになる。

このような力が他者から由来するというのは、誤りではないが、準範疇素の原算術的法則を尊重するかぎりで、それだけが真理性を汲み尽くすものだというわけでもない。倫理法的な要請の力は同者から由来するという命題も、それが自己・脱構築的な作働という関係の原算術的な水準で語られているかぎりにおいて、差延的な不一致としての真理性を伴う。とはいえ、このような複数の真理性が分節されうることの根拠を、要請がそこからあたかも産出されるという場所の脱根拠的な特性から分離することはできない。

コーラは厳命する。あるいは、あたかも、それは呼びかける。そこには、「物質なき唯物論によって、つまりは、「メシア主義」のためのコーラの唯物論によって」絶えず賦活されるであろう、「準-超越論的なメシア主義」から来たる命法がある。この法の伝達可能性を現実的に構成しているのは、作事実的な (artefactuel)、つまりは構成と自然のいずれにも共約しえない準超越論的な擬制⁽⁸⁹⁾によって、その呼びかけが代補的に担われるところの超-實在的な力である⁽⁹⁰⁾。「現実的なもの」は、「差異的回付の連鎖」において、代補の運動とともに「重生起する」(supervenir⁽⁹¹⁾)。高次の法の真理性は、「擬制という代補」によって、あたかも、基礎づけられる⁽⁹²⁾。脱構築不可

能な嚴命として伝承される法の力が、その現実性において作事實的に証言されねばならない、というこの二重拘束的な窮境を、デリダは「コーラの試練 (épreuve)」と呼んでいた。それは、コーラについての知が、「(知の彼方で) 知るべく残されている⁽⁹³⁾」ということの試練である。

この非知の知は、〈告示〉(annonce) という仕方において、経験の内にそれ自身の場を持つと同時に、記述不安定な痕跡を留めるだけで自らの真理を引き退かせていく。コーラ、ツィムツーム、もしくは「神」とは、こうした底なき崩壊の名「である」⁽⁹⁴⁾。神とは移行である、とデリダは記していた⁽⁹⁵⁾。あるいは、「聖なる場所」の偽名は「(神的な) 道⁽⁹⁶⁾」であるとも——これらは、「言語活動の終わりなき砂漠化の名」である⁽⁹⁷⁾。移行とは、差延と呼ばれる事象それ自身であり、他者であり、それ自身への〈関係なき関係〉における同者である。そのような道は、脱構築の不可能性と可能性の「間隙」に生起する⁽⁹⁸⁾。そのかぎりで、同者としての全き他者という移行の経験は、不可能なものの経験として可能である。そして〈そこ〉に、現存しないコーラが、さらには「コーラの内で遊動するものの全て——自らを神と名づけるものも含めて⁽⁹⁹⁾——」すなわち正義、贈与、絶対的な歓待、理性、法、至高性、等々という数々の事象が、おそらくはそこに有り、今日でもなお、知の残余としての場所それ自身という空性を代補する真理性への信とその不可能な証言とを歴史的に要請している、というのである。

反復

脱構築は構造的に連結した行為——出来事の作働を介して歴史的に産出される。それは準自然的な技術性を内蔵する経験であり、〈死生〉である。換言すれば、準超越論的な構制において、脱構築とは〈生〉である——このような準超越論的生の根拠、必然性、由来をめぐる問いは、脱根拠への問いに変換される。それは脱構築の経験がそこにおいてあるところの脱構築不可能な場所をめぐる問いへの転回である。構制的残余としての場所は、そこにおい

て脱構築の作働が可能となるところの、根拠律に基づくことによって証明不可能な要請であり、その法への関係ないし契約は神性の無神論的伝承として実践される。

註

- (1) この段階での「脱構築」は「脱」沈澱化 (dé-sédimentation) というより現象学的な響きを持つ概念とはほぼ同義であった。J. Derrida, «De la grammatologie (I)», *Critique*, n° 223 (1965), p. 1023. この論文は、大幅な改訂を経た後、問題を付された著書の第一部・第一／二章に収録された。De la grammatologie (1967) [= DG], p. 21. 邦訳『タラントロジーについて (上／下)』(一九七二／七六年)、上巻三二頁。〔凡例：引用文中の傍点のうち、中黒型のもの (・) は原文による強調、読点型のもの (、) は引用者による強調を表わす。原書と邦訳の頁数を略記する場合は原書＝邦訳の順に示す。〕
- (2) Derrida, *Force de loi* (1994) [= FL], p. 55. 邦訳『法の力』(一九九九年)、六二頁。
- (3) 存在様相とは、現前的「存在」を原形式とする措定の諸様式を指す (現実的、可能的、蓋然的、偶発的、偶発的、等々)。フッサールはこうした様相の集合を知覚信念の現実性・確実性とその変動態からなる系として記述していた [E. Husserl, *Ideen*, I (1922; 1928), §103-4]。
- (4) このような脱構築の実践の射程は前掲『法の力』第一部などで素描されていた。とくに人種主義の新たな問題化は合衆国の自由主義法学内部における批判法学から批判の人種理論に至る研究の中で推進されている。Cf. K. W. Crenshaw, N. Gotanda et al., *Critical Race Theory* (1995): eds. F. Valdes et al., *Crossroads, Directions, and a New Critical Race Theory* (2002), et passim. いわゆるグローバリ化は東アジアも同型の人種主義的な布置に組み込まれてきたという事態を日常的生の水準で顕在化させている。
- (5) これはブランショとレヴィナスの資料体から徴取された形象である。Derrida, *Parages* (1986) [= PR], pp. 73, 914, 1884, 2074 et passim.
- (6) これは対照的に、標準的な合理性に準拠する古典的な型の形而上学において、出来事概念は一般に時空や実体、性質といった構成素によって同定される個別の存在者を意味している。Cf. D. Davidson, "The Individuation of Events", *Essays on Actions and Events* (1980): Kim Jaegwon, "Events as Property Exemplification", *Supervenience and Mind* (1993).

- (7) 脱自帰属 (estasi-appartenenza) という表現はアガンベンからの引用であるが、デリダもまた同型の概念を予想させる推論を各所で展開している。cf. *DG* 91=i124; *PR* 179, 263-4, et passim; G. Agamben, *Stato di eccezione* (2003), p. 48.
- (8) この交叉的特徴に焦点を当てた研究として、R. Gasché, "Reading Chasms", *Of Minimal Things* (1999).
- (9) この法則については第四節で再説する。
- (10) ここに言う「虚」とは実数に対する虚数 (numerus imaginarius) の概念に類比的な、公理系を拡張する想像的特性を示すものである。出来事としての虚ない超・実在性に関連する考察として、Derrida, *Papier machine* (2001) [= *PM*], pp. 315-6; J. D. Caputo, "For the Love of the Things Themselves: Derrida's Hyper-Realism", *Journal for Cultural and Religious Theory* 1.3 (2000).
- (11) Derrida, *Marges - de la philosophie* (1972) [= *MP*], pp. 18-9. 邦訳『アチュー』(二〇〇四年)、『上』(二〇〇七年)、『ト・未完』(二〇〇九年)；卷五九頁；*Adieu à Emmanuel Lévinas* (1997) [= *AD*], p. 112. 邦訳『アチュー』(二〇〇四年)、『上』(二〇〇七年)、『ト・未完』(二〇〇九年)。
- (12) 「再記入」(ré-inscription) というように、古典的には個体の分割不可能性を意味する特異性概念が「変形」されてくることが含意されている。
- (13) Cf. E. Husserl, *Husserliana*, Bd. XIV, S. 143; 西田幾多郎「絶対矛盾的自己同一」、『全集〔新版〕第八卷』(二〇〇三年)所収。
- (14) *DG* 90=i122.
- (15) 初出は Derrida, *Glas* (1974) [= *GL*], p. 171/183f. この箇所については第四節で取り上げる。なお、準超越論性の概念を主題化した研究として、Gasché, *The Tain of the Mirror* (1986), n.b. pp. 316-8; G. Benington, «Derridabase», *Jacques Derrida* (1991) [= *JD*], pp. 248-63; *Interrupting Derrida* (2000), n.b. pp. 42, 55-6 et passim.
- (16) 準物質的であるとは、脱構築の経験がいわば物質なき前意味的な媒体性を本質としており、文字 (yoquin) ないし文字性の次元における文法・論理的な経験であることを指す。このような経験を晩年のド・マンは「文字の物質性」という問題系の中で考察していたように思われる。経験の準物質的媒体性を読解可能にする操作を初期のデリダは「意味の還元」と呼んでいた [cf. *MP* 161-2=i233-4]。媒体性概念の基本動機に関しては、新田義弘「現象学と近代哲学」(一九九五年)；『世界と生命』(二〇〇一年)などを参照。
- (17) したがって、行為の存在論的な圧力が減殺される二つの審級において、経験概念はしばしば非他動詞的・中動態的に用いられる。

- (18) Cf. *Spectres de Marx* (1993) [= SM], pp. 151.
- (19) *PR* 207-9n, 214n; cf. *DG* 100=i141; *L'écriture et la différence* (1967) [= *ED*], p. 302 et passim. 生死の対立を非生命論的な次元で複雑化させる死生の概念は、伝承や遺産、転生をめぐる問題系と不可分である。Cf. *Psyché*, t. I (1987-2003), pp. 214f; SM 17-8, 93-4, 224, 235-6, etc.; *Apprendre à vivre enfin* (2005), pp. 54-5 et passim. 邦訳『生を学ぶ』を参照。終二』(1100五年)『六三十四頁他、各所。
- (20) Cf. *DG* 374=i234; *Du droit à la philosophie* (1990), p. 48; «Économimesis» [= *EC*], S. Agacinski et al., *Mimesis - des articulations* (1975), p. 69. 邦訳『エロメニメシス』(11006年)『三六頁; “For’s”, N. Abraham & M. Torok, *Le vertier de l'homme aux loups* (1976), p. 37. 「FOR’S」邦訳『狼男の言語標本』(11006年)『一〇五頁; cf. *ED* 426.
- (21) Derrida, “following theory”, eds. M. Payne & J. Schad, *life. after. theory* (2001), p. 27.
- (22) *ED* 302, 170.
- (23) H. Putnam, *Renewing Philosophy* (1992), pp. 123-33; *Ethics without Ontology* (2004), pp. 115-21 et passim. 邦訳『存在論抜き倫理』(11007年)『一三八-四五頁他、各所。
- (24) Idem, *Renewing Philosophy*, p. 132.
- (25) *FL* 55-6=63-4.
- (26) 井上達夫「普遍の再生」(11003年)『xi, xvii頁註。
- (27) *FL* 40-2=42-3. 以下に言及「肉食的な」(cannivore)とは「人間」ではない者たちとその財を犠牲にする、という新旧の植民地主義的な態勢である。このような語法はモンテニョやスウィフト、サマなどの資料体にすでに認められる。
- (28) Putnam, *The Collapse of the Fact / Value Dichotomy* (2002), p. 108. 邦訳『事実／価値二分法の崩壊』(11006年)『一三六頁。
- (29) 例えば自由主義的な統治原理である法の中立性・自立性がそれである。人種概念への中立を謳う原則は、差別是正を掲げる立法によっても、常態と化した構造的差別に実効的に介入しえず、人種の不平等を解決しないばかりか、むしろ現状をそのつと巧妙に維持するものとなる。Cf. Gotanda, “A Critique of “Our Constitution is Color-Blind””, *Stanford Law Review*, v. 44 (1991).
- (30) 以下「原算術」というとで、歴史性の起源に位置するであろう時間経験の技術的な形式を想定している。例えば、ス

ペンサー＝ブラウンの代数学における「二周期解」＝ $0=1$ の導入とその矛盾の解消、という時間の契機を導入する操作は、おそらくその一つの範例である。

- (31) 記号は各概念が廻行的に関連づけられる古名の語根から採られている。行為 $\alpha = \alpha\gamma\epsilon\upsilon\upsilon$, agit, acte; 出来事 $v = ven-$ [$\leftarrow va-$, ba- (cf. Boileau)] \rightarrow venire, eventum, etc.; 場所 $\chi = \chi\omicron\phi\omicron\alpha$.

- (32) Cf. PR 271-3; *Résistances de la psychanalyse* (1996), pp. 100-1 et passim. 邦訳『精神分析の抵抗』(二〇〇七年)「一五〇-1 頁他。

- (33) 現実界・象徴界・想像界の関係が位相論とともに主題化的に導入されたセミナーの記録として「J. Lacan, R. S. I. Séminaire 1974-1975 (2002)。

- (34) Cf. idem, «La science et la vérité», *Écrits* (1966)。

- (35) E.g. idem, "Of Structure as an Inmixing of an Otherness Prerequisite to Any Subject Whatever", eds. R. Macksey & E. Donato, *The Languages of Criticism and the Sciences of Man* (1970; 1972), pp. 195-6. 上の箇所でラカンは位相論と無意識の構造の関係を「類比」ではなく「実在的な」対応であるとしており、後に概ね科学的實在論・実証主義に立脚する自然科学者たちからの批判を受けることになる。

- (36) 金子邦彦・津田一郎『複雑系のカオスのシナリオ』(一九九六年)、三二八頁；金子邦彦『生命とは何か』(二〇〇三年)、第一二二章。

- (37) 位相論的模型の構築に際して、脱構築を観測し記述する者自身が脱構築に関与している、という内面的かつ外的な観測が生じることになる。ここでの記述者の位置は、例えば脳の記述者が脳システムに組み込まれている、という状況と同相にある。松野孝一郎『内部観測とは何か』(二〇〇〇年)・郡司ペギオ幸夫『原生計算と存在論的観測』(二〇〇四年)「一四六、一二三頁などを参照。

- (38) *FL* 62; *Sur Parole* (1999), pp. 71-2 et passim.

- (39) *FL* 35=34, 54=62.

- (40) *FL* 42-3=44.

- (41) 高橋哲哉「絶対」の思考」『現代思想』第三二巻・第一五号(二〇〇四年)「一二九頁。

- (42) DG 102-3=1142では脱構築における仮説の選択と歴史的戦略、時代性の関連について言及されている。

- (43) 西田「場所」『全集（新版）第三卷』（二〇〇三年）所収。
- (44) 真理性の制作 遂行とこの問題系について cf. Derrida, «Circonfession», *JD* 48-51; *FL* 60-70; «La vérité blessante», *Europe*, n. 901 (2004).
- (45) Derrida, «Force et signification (I / II)», *Critique*, n° 193 / 194 (1963), pp. II 626-7 = *ED* 36-7; «Sémiologie et grammaatologie», *Information sur les sciences sociales*, v. 7 (1968), pp. 148 et passim. 邦訳「記号学と書字学」『声と現象』（一九七〇年）所収、二二三頁⁴ 他。
- (46) Idem, «Structure, Sign, and Play in the Discourse of the Human Sciences» [1966], eds. Macksey & Donato, *op. cit.*, p. 259 = *ED* 422.
- (47) Idem, «Force et signification (II)», *op. cit.*, p. 626n7 = *ED* 36n1.
- (48) *ED* 42.
- (49) 「逆還元」(contre-réduction) とは、或る与件が地平志向性を経由せずに出現するという原受動的な触発性の領野を開示する操作にM・マンリが与えた名称である [M. Henry, *De la phénoménologie, Tome I* (2003), pp. 105-21]。触発性をめぐる脱構築と物質的現象学の解釈は対蹠的であるが、現われざる現象性とその経験を表象主義との直交によって張られる座標中に指定するという動機に関するかきりで交差する場を持つと考えられる。なお「グラマトロジック的還元」についてはCaputo, *Radical Hermeneutics* (1987), pp. 120f.
- (50) Derrida, «Sémiologie et grammaatologie», *op. cit.* 本節が特に参照する箇所は pp. 147-8 = 223-4.
- (51) Meister Eckhart, «Predigt XIX», Insg. F. Pfeiffer, *Deutsche Mystiker des vierzehnten Jahrhunderts*, Bd. 2 (1857; 1962), S. 81, 138. 邦訳『エックハルト説教集』（一九九〇年）所収、一八〇頁。
- (52) Derrida, *La carte postale* (1979), p. 12. なお「ユダヤ教典に現れる使者は伝言を一人称によって引用することが知られてゐる」。
- (53) 端的に「脱構築とは何か」と題された、デリダ自身による一九九二年の発言記録も残されてゐる。Idem, «Qu'est-ce que la déconstruction?», *Le Monde*, mardi 12 octobre 2004.
- (54) Idem, «Lettre à un ami japonais» (1985 [= LA], *Psyché*, t. II (2003). この論考が最初に公表されたのは次の日本語訳を通じてであった。邦訳「解体構築」*DÉCONSTRUCTION*とは何か」『思想』第七一八号（一九八四年）。ただし、邦訳版と単行

本に収録されたものとは内容に若干の異同がある。

- (55) *LA* 9=19.
- (56) 「手短かに言えば、哲学をも「特殊な文字的 [littéraire] ジャンル」として、「言語活動の貯蔵から汲み取り、哲学よりも古い転義的資源の総体を配列し、曲用し、迂回させるもの」と見なすこと」 [*MP* 348-9]。この「littéraire」という語には、書字の媒体性を反映させた使用域がすべてに与えられているのび、このびそれを隠喩的に「文学的」とは訳さないでおく。
- (57) *ED* 135, 157.
- (58) Idem, «Comment ne pas parler. Dénégation» [1986], *Psyché*, t. II. なお、精神分析における否定の概念は、否認 (Verleugnung = déni) や神経症的抑圧から区別される。
- (59) Idem, *Sanf le nom* (1993) [= *SN*], pp. 88-9. 邦訳『名を救う』(二〇〇五年)、八二頁。
- (60) *LA* 12=22-3.
- (61) *LA* 12-3=23-4.
- (62) *DG* 54-5=178.
- (63) *PO* 62=67.
- (64) Idem, *Points de suspension* (1992), p. 147; cf. *PO* 55=58.
- (65) *ED* 206-7.
- (66) *ED* 205-6, 206n2. 引用文の前半の命題は、『ソピステス』の中で扱われていた問題系に属する。
- (67) *DG* 226=132.
- (68) *MP* 18-9=159.
- (69) *AD* 112=93.
- (70) 存在定立論 (Ontotheseologie) の構想について W. Hamacher, »Pränissen«, *Enfermes Verstehen* (1998).
- (71) *GL* 17II / 183L.
- (72) *EC* 89=87.
- (73) *GL* 12I.
- (74) Idem, *La dissémination* (1972) [= *DSS*], p. 13.

- (75) *PM* 309.
- (76) Idem, *Khôra* (1993) [= *KH*], pp. 30, 32. 邦訳『コーラ』(二〇〇四年)、『二四』二六頁。なお、初期のデリダは空間化がそ
うして「自らを空間化する」場所としてコーラを解釈していた [*DSS* 22]°。
- (77) Platon, *Timaeus*, 48e, 50c: *KH* 15-6, 22=9-10, 16-7.
- (78) *KH* 10In2=93n2. M. Heidegger, *Einführung in die Metaphysik* (1953), S. 50.
- (79) *KH* 32=26.
- (80) *KH* 16=10: *Timaeus*, 51b.
- (81) *DSS* 204.
- (82) *KH* 19, 57=13, 48.
- (83) Idem, *La vérité en peinture* (1978), pp. 331-2. 邦訳『絵画における真理(上／下)』(一九九七／九八年)、『下巻』一八二三頁。
- (84) *KH* 93-4=87: *Timaeus*, 48d-e, cf. 29c4-d3.
- (85) *KH* 15, 62-3=9, 54.
- (86) *KH* 59, 63, 85-8=51, 54, 79-82.
- (87) M.-A. Ouakim, *Tintinsum* (1992), pp. 15-6.
- (88) *SM* 56; *Marx & Sons* (2002), p. 77n64. 邦訳『ブルクスと息子たち』(二〇〇四年)、『一四』二頁註六四°。
- (89) 超越論的な擬制の問題を考察した論考として Ch. Norris, "Transcendent fictions", *Contest of Faculties* (1985).
- (90) 超実在性に関しつて註(10)をも参照°。
- (91) *DG* 228=i36.
- (92) Cf. *FL* 30=28.
- (93) *SN* 95=88.
- (94) *SN* 56=49.
- (95) *ED* 22-3.
- (96) *CP* 254.
- (97) *SN* 56=49.

(8) Cf. *FL* 35=35.
 (9) *SV* 95=88.